

平成30年6月11日現在

機関番号：32406

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K01962

研究課題名(和文) タイにおけるコミュニティ・ベース・ツーリズムの経済人類学的研究

研究課題名(英文) Economic anthropological study on community based tourism in Thailand

研究代表者

須永 和博 (Sunaga, Kazuhiro)

獨協大学・外国語学部・准教授

研究者番号：70550002

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、タイの農山漁村において、地元NGOと協働で行われているコミュニティ・ベースド・ツーリズム(CBT)の諸相について人類学的視点から明らかにした。具体的には、北部の山地民カレンの集落において、および南部離島の漁村コミュニティにおいてそれぞれ民族誌的調査を実施し、CBTに関わる人々がCBTを単に経済活動として捉えるのではなく、自文化を外部に向かって発信する手段や、コミュニティ意識を高める媒体として捉えているなど、CBTの多義的な意味を明らかにすることができた。さらに本研究では、こうした観光実践を「半市場経済」と位置づけ、その社会的意義や可能性についても考察を行なった。

研究成果の概要(英文)： This research is an anthropological study on community based tourism (CBT) in Thailand, managed in cooperation with local NGOs. I conducted ethnographic fieldwork at two different communities, a highland ethnic Karen community in the North and a southern coastal fishery village. Through those field research, it is revealed that the community members consider CBT not as a mere economic activity, but as a tool to convey their indigenous cultures and their ways of lives to the outside world and as a vehicle to cultivate their community consciousness. Moreover, this research analyzed these tourism practices as 'semi market economy', and argued their social significance and possibilities.

研究分野：文化人類学・観光研究・東南アジア地域研究

キーワード：観光人類学 観光社会学 タイ地域研究

### 1. 研究開始当初の背景

資本主義社会の周縁部に生きる人々が、外からやってくる観光開発を、どのような文化的価値や道徳的基準にもとづき受け入れているのか、言い換えれば経済活動としての観光にいかなる文化的・社会的諸相を埋め込みながらローカルな観光実践を生み出しているのかを明らかにすることで、観光研究に新たな視座を提供する。

### 2. 研究の目的

本研究は、タイの農山漁村で行われているコミュニティ・ベース・ツーリズム (CBT) を事例として、(1) 観光化に直面した人々がその状況にどう対応しているのか、(2) それによってホスト社会の人々の生活世界がどのように再編されていくのかという点について、人類学的フィールドワークによって明らかにすることを目的としている。

そこでは、モラル・エコノミー論などの経済人類学的視点を手掛かりに、観光実践に埋め込まれた文化的・社会的諸相を明らかにし、資本主義システムの周縁に生きる人々が、資本主義的開発としての観光に巻き込まれつつも、そこに完全に包摂されることなく、一定の自律性を維持しつつ観光に関わっていく可能性について検討する。

### 3. 研究の方法

本研究では、(1) コミュニティ・ベース・ツーリズムを導入しているタイ北部の山地民カレン社会および南部のムスリム漁村における集約的フィールドワーク、(2) その運営をサポートする NGO 等の諸活動に関する参与観察を行なった。

また適宜、主たる2箇所フィールドに近接するコミュニティにおいても補足的な調査を行なった。

### 4. 研究成果

#### (1) CBT とは

コミュニティ・ベースド・ツーリズム (CBT) とは、観光の受け皿となる地域コミュニティが観光開発・運営に主体的に関わることで、観光からの経済的・社会的恩恵を地域コミュニティのメンバーに適正に分配すべきであるという観光開発の理念である。

国家や外部資本による大規模な観光開発は、自然環境や地域の生活の場に大きなインパクトを与え、しばしば地域住民を周辺化してきた。特に、先住民族や少数民族、途上国の農山漁村などの小規模なコミュニティでは、観光開発に伴う周辺化の問題がより顕著に現れることが多かったといえる。

このような状況のなかで、1980年代くらいから、より持続可能で適正な観光のあり方を模索する動きが広まっていく。この時代は先住民族の文化復興運動や環境運動などが世界的に活発化していく時期でもあり、それらの社会運動とも密接に関わり合いながら、ロ

ーカルなコミュニティが主役となるような CBT の考えが登場したのである。

#### (2) タイにおける CBT

現在タイは、東南アジア諸国で最も CBT が盛んな国の1つとなっているが、その先駆的な事例として知られているのが、国際的なビーチリゾートであるプーケットに隣接しているヤオノイ島の取り組みである。

プーケットの東側パンガー湾に位置するヤオノイ島は、住民の大半がタイ系ムスリムであり、小規模漁業に従事している。

CBTに参加する観光者は、島滞在中、(主に漁師をしている)島民の家にホームステイをしながら、島の生活文化を体験したり、ムスリムの宗教生活について学んだりすることができる。そして観光者には、あらかじめムスリムの慣習とそれにもとづく島滞在時のルール(飲酒や肌の過度な露出の禁止)が説明され、滞在中はそれを守ることが求められる。

このような取り組みがヤオノイ島で導入された背景としては、以下の2つの点を指摘できる。まず第1に、住民の大半を占めるムスリムの慣習に配慮した観光のあり方を模索するということである。プーケットから高速船で30分程度の距離にあるヤオノイ島では、外部資本によるリゾート開発も同時に進行している。こうしたなか、「第2のプーケット」になることを恐れた一部の住民が、コミュニティ主導での観光開発を模索することを目指していったのである。上述のようなムスリムの慣習についての説明やそれにもとづく滞在時のルール設定などは、こうした文脈で作られたものである。

そして第2には、住民の主たる生業である小規模漁業のあり方を外部に発信するメディア(媒体)として CBT を利用するという考えである。CBTを導入した1990年代、ヤオノイ島が立地するパンガー湾では、小規模漁業に従事する島民と外部の大規模なトロール漁船との間で資源利用をめぐるコンフリクトが深刻化していた。タイの漁業法では、沿岸から3km圏内は小規模漁業従事者の保護のため、トロール漁船の操業は禁止されている。しかし当時は、こうした法律を無視したトロール漁船がヤオノイ島沿岸域で漁を行っていた。そこで、ヤオノイ島の住民は、観光者に自分たちの伝統的な生業を体験・学習してもらうことで、彼らが抱えている問題を外に向かって発信するということを企ていったのである。

このような自文化を外部に発信する手段として CBT を利用するという考えは、タイの他の地域においても共通してみられる現象である。

#### (3) 半市場経済と CBT

筆者がフィールドワークを行なった地域の住民は「CBT はビジネスではない」という

ことを強く語る。たしかに、CBT は観光者を受け入れて経済的収益を得るという意味では、経済活動に他ならない。しかし、それを目的化、すなわち経済的収益の最大化や拡大再生産といったことを目指しているわけではないということである。言い換えれば、南タイの漁村や北タイの山地少数民族の人々にとって CBT とは、単なる経済活動ではなく、自分たちが抱えている問題を外に広め、その問題を変革していくという、社会運動としての側面を強くもっているのである。

こうした姿勢は、哲学者の内山節が述べる「半市場経済」と呼ぶことができる。内山は、エシカル・ビジネスやフェアトレードなど、市場を活用しつつも、目的は市場経済の原理とは別のところにある営みを半市場経済と位置づけ、こうした活動のなかに資本主義システムを再編する可能性をみている。

#### (4) 媒介者としての NGO

ところで、タイにおける CBT を語る上で無視できないのが、現地の NGO の存在である。上述の 2 つの事例においても、現地の NGO の役割は大きいものであった。そこで以下では、CBT における NGO の役割について確認しておきたい。

まず第 1 に、CBT 運営に必要なノウハウの提供や地域間ネットワーク形成のサポートといった役割が挙げられる。たとえば、CBT を導入している村落間には、NGO が媒介となった国内外のネットワークが形成され、研究フォーラム等の様々な交流の機会が設けられている。実際、前述のヤオノイ島とカレンの村の人々は、これまで幾度となくお互いの村を行き来し、NGO が主催するワークショップ等で顔を合わせ、様々な意見交換を行ってきた。そして、こうしたネットワークを活用して、新たに CBT に参入するコミュニティには、視察やモニター・ツアーなど、先行実施地域のノウハウについて学んだりする機会が提供されている。

そしてもう 1 点、NGO の役割として指摘できるのが、生活文化の「再発見」「資源化」の媒介者としての側面である。地域住民にとって、身の回りの生活文化はあまりに「当たり前」すぎてその潜在的価値に気がつかないことが往々にしてある。そこで NGO という「よそ者」の視点を活用することで、地域住民と協働で、当該コミュニティのなかで潜在的な観光資源を探し出していくのである。さらには地域住民にとって、こうした協働作業が、自身の生活文化を再帰的に捉え直し、アイデンティティの再構成につながっていくこともある。

以上のことから分かるのは、コミュニティとは決して自己完結的なものではなく、NGO や他地域のコミュニティなど外部のアクターとの協働のなかで不断に再構成されているということである。したがって、CBT という現象を考察するためには、コミュニティと

外部アクターとの諸関係についての動的な把握が不可欠といえるであろう。

#### (5) 政策的対象としての CBT

この点を考える上で、近年では政府機関の存在も無視できないものとなっている。すなわち、政府の様々な機関も CBT の運営に積極的に介入するようになってきているのである。たとえばタイでは、政府観光庁がタイ観光賞(Thailand Tourism Awards)の 1 つとして、優れた CBT の取り組みを村落単位で表彰するといったことが行われている。さらには、こうした国家的枠組みのみならず、2016 年には ASEAN レベルでホームステイを受け入れるコミュニティの認証評価を出すといった試みも始められている。

これらの取り組みは、従来の観光開発のなかで周辺化されがちであった地域住民のエンパワーメントを支えているという点では一定の評価が出来るかもしれない。しかし、認証評価を得るための基準が厳しく、コミュニティ内でも一定の経済水準に達している世帯のみが参入できる状態を生んでしまっているなどの問題も散見される。言い換えれば、政府機関による認証評価が制度化されるなかで、コミュニティ内の貧困層が CBT からの経済的・社会的恩恵が得られなくなっているなどの問題が生じているのである。この点を踏まえると、CBT を考えるためには、コミュニティと外部アクターとの関係のみならず、コミュニティ内部の格差や権力関係などのミクロな把握もまた不可欠といえるであろう。

#### <引用文献>

内山節 2015『半市場経済 成長だけでない「共創社会」の時代』角川新書

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

#### [雑誌論文](計 1 件)

須永和博、周縁へのまなざし、周縁からの応答 タイ北部におけるコミュニティ・ベースド・ツーリズム、Encounters(獨協大学外国語学部交流文化学科紀要、5号、2017、1-14)

#### [学会発表](計 1 件)

須永和博、周縁へのまなざし、周縁からの応答 タイ北部におけるコミュニティ・ベースド・ツーリズム、日本タイ学会第 17 回研究大会

#### [図書](計 3 件)

須永和博、丸善、『東南アジア文化事典』(「グリーンツーリズム」を担当)、2018(脱稿済み)、全 2 頁

須永和博、丸善、『東南アジア文化事典』  
(「コミュニティ・ベースド・ツーリズム」  
を担当)、2018(脱稿済み)、全2頁

須永和博、新曜社、『ワードマップ観光学』  
(「観光人類学の現場から-タイにおけるコ  
ミュニティ・ベースド・ツーリズム」を担  
当)、2018(脱稿済み)、全9頁

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

<http://dotts.dokkyo.ac.jp/2016/03/20/> タ  
イ王国パンガー県・ヤオノイ島を訪れて(須  
永/

6. 研究組織

(1) 研究代表者

須永 和博 (SUNAGA, Kazuhiro )  
獨協大学・外国語学部・准教授  
研究者番号：70550002

(2) 研究分担者

( )

研究者番号：

(3) 連携研究者

( )

研究者番号：

(4) 研究協力者

( )